

ノンフィクション 児童文学 いまここから

国松俊英

1

二〇一一年三月十一日に東日本大震災が起きて、東北地方にとても大きな被害をもたらした。それから二年と半年が過ぎた。震災後直ちに現地につけ、被災地を歩いてその状況をまとめた作家がいた。過酷な状況の中で歯を食いしばりながら立ち上がろうとする被災者たちのことを、作品に著わした作家もいる。

私といえば、報道された大自然の破壊力の凄さに呆然とし、被災した人たちの苦しみや悲しみを思って、ただおろおろしていただけだ。そうして時間がたってしまった。同じノンフィクションに取り組んでいても、心構えと行動力にとても大きな違いがあるものだ。

三月十一日から現在まで、被災地のできごとやその人々を題材にしたノンフィクション作品がいくつ出版された。読んだ本の中でも印象に残る本があった。まず一般向けの作品では、『遺体 震災、津波の果てに』（石井光太／新潮社）と『河北新報のいちばん長い日』（河北新報社／文藝春秋）の二冊を上げたい。

『遺体』の舞台は、岩手県の釜石市の遺体安置所になっている。釜石での地震と津波による死者・行方不明者は一〇〇〇人を超えた。亡くなった人たちは、体育館などの遺体安置所につきつきと運びこまれてきた。著者は震災から三日後に釜石に入って、三か月にわたって取材を続けた。著者は、市職員、民生委員、医師、歯科医師、葬儀社社員など遺体処理に関わった多くの人たちから話を聞き取る。そしてたくさんさんの遺体が出会い、たどった残酷な状況を、きちんと書き留めていったのだ。数百の遺体が所狭しと並べられた体育館の風景は、読む者を圧倒する。遺体に「人間としての尊厳」を与えようと、懸命に働く人たちの姿が強く胸に迫ってくる。テレビや新聞は伝えなかつたけれど、著書が書いたのは東日本大震災の被害者たちの本当の姿だった。

『河北新報のいちばん長い日』は、宮城県仙台市に本社がある新聞社のことを描いたノンフィクションだ。三月十一日午後、大地震が起きた瞬間の新聞社のようすから書き出される。記者だけでなく、営業・総務・印刷・輸送の担当